
Fate/destiny

ATNEK

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a t e / d e s t i n y

【Nコード】

N 3 2 8 1 J

【作者名】

A T N E K

【あらすじ】

“彼”は誰なのか？

調停者。『』を理解する者。

彼の呼び名。しかし、様々な世界に様々な“彼”が居る。

これはそんな“彼”の一人、“運命”と共にあった者の物語。

※オリ主ものです。

※型月作品とリリカルなのはシリーズがクロスしています。

※独自解釈、独自設定が入ってきます。

※両作品を愛している方々を納得させられるほどの設定ではありません。

※ご都合主義、原作との矛盾、キャラ崩壊……多分に入ってくると予想されます。

Fate／destiny prologue

今、自分は何もない空間に居る。

何で自分はここに居るんだろうか？

確か、俺は今日は第一希望の大学の試験日だからって、

いつもより早く起きて朝飯を食べて、身支度して。

それで開始時間一時間前に着くぐらいの時間を見計らって、家を出たんだったよな。

んで、何で自分はこんな場所にいるんだ？

まさか、電車の中って訳じゃないし……。

——ん？電車、電車。何か忘れているような……

ああ、そうだ。思い出した……。自分が乗っていた電車が街中で爆発したんだ……。

覚えてるのが、物凄い衝撃と熱さだから爆発だと思っただけど、あれは一体なんだったんだろうな？

何かニュースで『世界中でテロが頻発してる』とかやってたっけ。それなのかな？

うーん、つうことは此処は死後の世界ってヤツなんだろうか？

何処で爆発したかは分からんが、結構近くだったと思うしな。万に一つで命拾えるくらいか？億に一つかもな。

“父さん、母さん。とりあえず謝っておくよ。ごめんなさい、こん

な親不孝な息子で。次があつたら、しっかり親孝行するから許してくれ……”

——俺は自分で言うのも難だが、諦めが早い。自分に絶対に無理だと判断すると、すぐ諦めてしまう。

まあ、何故か“絶対に無理”だと判断しない限りは周りに合わせてやっちまうんだけだな。今回はその諦めの良さのおかげで周りに注意を払う余裕があるんだよな。

今の時点で、生き返ることは絶対に無理だと思っちゃってる。俺がすぐに無理って判断した事柄は大抵、絶対に無理な事柄だ。無意識に解っちまう。

はてさて、此処は本当に何にもないねえ。本当に何にもない。色すらない。全てが無色透明だ。にも関わらず果てってモンがない。

俺の周りには色々なモンがある。さっきの『何もない』って表現と矛盾するが、そうなんだと頭が勝手に“理解”している。

端的に表現するなら、“解ってしまうんだから、しようがありません”かな……。

確か、無自覚で神様の真似事する少女のお供のエスパー少年の言葉だった気がするが。

俺が自分の周りに何かあると理解すると、今度はそれが何なのかってのかを頭——死んでるようだから“魂”のほうがいいのか——が勝手に“理解”しようとする。

“やめろ”

俺は反射的にそう口にしていた。

まあ、ホントに言葉になったかは分からんが解ってしまったのだ。

——これは“理解”してはならないと——

だが、俺の魂は勝手にそれを“理解”しようとする。

“やめろ……やめろ……やめろ、やめろ止めろやめろ止めろヤメ……あアっあアあああアあアああ！！！！”

俺の制止も空しく、俺の魂は勝手にそれを“理解”した。“理解”した瞬間、俺はその情報量の多さに耐え切れず悲鳴をあげた。ホントに凄まじい情報量だ。

ほとんどのものは、“理解”した傍から“保留”されていく。

それは、まるで読みきれない本を後で読むために自分の横に置いておくような感覚だ。

どんどん読む本が渡されるせいで読む暇が無い。一々読んでいたら、処理しきれない。

その情報の波は少しすると、収まってきた。

———いや、収まってきたというより、俺の方が慣れてきたって感じた。

情報の波を“閉じられた本”って感じでイメージしたら、随分とマシになった。

しかしながら、これはほんの一部だってことも“理解”した。ここにある全ての情報からしたらほんの一部、氷山の一角に過ぎない……。

まるで、『鋼の錬金術師』に出てくる“真理の門”や、型月作品に出てくる『』だ。

エドとかはこんなのをあの年で経験したのかね？

——俺がそのことを完全に飲み込む前に俺の魂は“理解”していた。ここが、『Fate/stay night』などの型月作品に出てくる『』や、『鋼の錬金術師』に出てくる“真理の門”と同じようなものであると。

うーん……俺の知らない世界の裏側ってヤツか？

それとも平行世界か、もしくは異世界？　そうゆうところがあった、

でも全ての世界に共通でこの『』みたいなモノが存在するってこ

となのかな？

つーか、なんで俺は此処で自我を保っていられるんだ？

なんか、並の者じゃ行っても帰って来れないとかそんな感じの説明無かったっけ？

俺が考えを巡らしていると、自分に何かが伝わってくる。

伝わってきた内容を纏めると、

・俺は“理解”という起源を持っているらしい。

・その“理解”の起源が『』に近づくたびに、『』を少しずつ理解しようとしていった。

・俺が死んで、魂が『』に辿り着いた時に“理解”の起源が『』を“理解”してしまった。

・死んだ直後で、まだ消滅しきっていなかった俺の記憶と“理解”が交じり合って、擬似的な英霊のようなモノになってしまった。
・『』も人為的ではなく、自然に生まれた俺を消す気は無いらしい。

こんな感じである。

うん、確かに言われてみると記憶が少し曖昧になってる部分があるな。

死んだ直後で無ければ、俺の記憶が残らないでそのまま次の宿主が知識を得るか、意識のないまま使役されていたわけだ

俺がそんなことを考えていると、また新しい意思が伝わってきた。
先ほどと同じく要約すると、

・俺には守護者と同じようなモノで調停者というものになってもらう。

・俺の役目は滅びを迎える可能性のある世界に派遣され、その世界の住人として過ごしつつ、抑止力として滅びを回避する事。

・滅びが起ることが回避しきれない場合、守護者と同様にその土地ごとでも滅びの原因を排除することになる。

ということだった。

俺が理解するが早いのか、俺の魂は何かしらの力によって引っ張られる。

そして、俺は新たな人生を歩み出す……

Fate／destiny 1-1:ディスティ・テストロッサ

俺が目覚めて、最初に確認したのは自分の状況だった。

俺が覚醒した場所は薄暗い研究所らしき場所だった。俺はその一角に座り込んでいた。

滅びの直前という訳でもないようで、俺には何故にこんな所に放り出されたのか分からなかった。

「『』からの支援は——やっぱり無しか……」

まあ“その世界の住人として”とか行ってたからな……。

さて、“理解”の起源によって得た知識にアクセスしてみるとしよう。

俺は目を閉じる。そして、そのまま己の中へ意識を埋没させていく。

——そこはまるで巨大な図書館だった。

円形の塔の様な空間。

周りの壁一面は全て本棚になっていてその中は余すところ無く、様々な本で一杯になっている。

そして本棚は遥か高く頭上に伸び、果てというものが見えない。その、まさに無尽と言っている本たちに囲まれた中央の開けた場所。

そこに在ったのは祭壇のようなものだった。

他より少し高い位置に在り、その場所を他と区別する台。

その中心には壇が在り、透明な球体が安置されていた。

この、理解の起源によって『 』から写し取られた尽きる事の無い叡智によって構成された世界。

その住人たる本たちがこの世界の主たる俺に知識を捧げる場。

そして、この世界の中心と言っていいその球体を安置する場。

——まさに“祭壇”だ。

俺は、その祭壇の中央に在る水晶球の下に向かう。

俺がその球体に手をかざすと、球体が仄かに光を発した。

——すると、周りの本棚から幾つかの本が独りでに浮遊し、俺の下に向かってくる。

俺の下に向かって来た本たちは、傍まで来るとそのまま俺の周囲に留まる。

周囲に浮かんでいる本の内の一冊を手にとると、ゆっくりと開いた。

——此処に在る本たちは、本という形を取っているだけであり、そこに込められた知識を閲覧するのに“読む”等という行為は必要ない。

本を開いた俺の内に、本に込められた知識が流れ込む。

俺は入ってきた知識を整理していく。

「俺の能力は、この場所にある知識と理解の起源によって付加された“視界の中に存在を認識し、それを理解する”魔眼の二つ……。魔力・筋力などがあれば、ここにある魔術や魔法、技術などは基本的に全て使えるけど、その世界に基盤が存在しないものに関しては使用不可か……」

それに、今の状態では例え使えても、“使える”だけであって“使いこなせる”訳ではないか……

この世界にある知識は圧縮されたパソコンのデータのような感じ

だ。解凍しなければ中身を見ることは出来ない。だが、容量を圧迫することもない。

人間の一人の中に収めるには多すぎるのだ、ここにある知識は。

「型月作品に出てくる魔術と『魔法』って汎用性高いんだな……ほとんどの世界に基盤があるのか。……まあ、世界を渡るなんてほとんどの人間にとって、夢のまた夢だろうけど」

今のところ欲しい知識は大体手に入れた。

俺は意識を浮上させていく。

interlude in

薄暗い研究所らしき場所、そこで二人の女性が向き合っていた。

「何も殺す必要は無いでしょう!？」

「いいじゃない。元々、廃棄する予定だったんだから」

声を荒げている方の女性、彼女の後ろには5歳前後の子供が転がされていた。

彼女はその子供を庇うようにもう一人の女性に抗議している。

もう一人の女性は、鬱陶しそうにしながら口を開いた。

「なら、こうすればいいのかしら」

「なっ!？」

不意に子供の足元に魔法陣が展開される。

魔法陣が強い光を放つと、子供の姿は消えた。

interlude out

俺が目を覚ますと、そこは先ほどの薄暗い研究所ではなく、夜の野原だった。

見上げれば、たくさんの星が輝いている。

「———どういうことだ？ さっきまでと全然、場所が違うんだが……」

「———ふむ。それはワシも知りたいのう？」

唐突に俺の後ろから声が掛かる。

俺がその声に反応して、後ろを振り返るとそこには———

———黒いローブを着た銀髪赤目の老人が立っていた。

俺の目がそれを『認識』した途端、俺の頭にその人物を『理解』する。

「あなたが……宝石翁キシユア・ゼルレッチ・シュバインオーグですか……」

「その通りじゃ……して、調停者よ。こちらの質問に答えてくれるか。何故そんな幼子の姿をしている？」

「はい？」

言われて、俺は自分自身に『理解』を行う。

自分自身であれば、眼で捉えなくとも『理解』出来るのだ。
結果的に分かった事は――――

- ・この体は、プロジェクトF・A・T・Eによって作られた、アリシア・テスタロッサのクローン体であること
- ・その内、完成体を制作する前に作られた男性型の実験体であること

- ・現在の肉体年齢は5歳程度であること
- ・魔術回路、リンカーコア共に存在すること
- ・その他、魔力量や筋力など

――――などである。

基盤としては今のところ、型月の魔術に『魔法』と、ミッドセル方式の魔法……。他にも在るかもしれないけど――後々調べればいいか。

そう結論付けながら、先の質問に答える。

「うーん……自分でも分かりませんね。

強いて言うならば、“世界”が“その世界の住人として”と言っていたので……そのせいかと」

「ふむ、そうか。それで、御主はどうする気なのだ？」

「どうする気……とは？」

「その体では、滅びを回避するにも一苦労じゃろう？ここは町の近くじゃが、今この辺りの生物は餌が無くて飢えているしな」

「後ろにそれらしき生物が転がってるんですが……」

「うむ。先ほど、御主を襲おうとしていたのだな。倒しておいた」

「あ、ありがとうございます……ていうか、あなたは次元世界の存在を知ってたんですか？」

「ああ、知っていたぞ。何人か知り合いもおる。……これを知っている魔術師は居ないだろうがな」

「そうだったんですか。……此処には何故？」

「調停者の誕生というのは世界に極々僅かなれど影響を与える。本来なら近くに居ても分からないだろうが、ワシは第二魔法“平行世界の運営”の使い手。世界の些細な変化も捉える事が出来る。その影響を感じ取って此処までやって来たのだ。

話が逸れたな、それで御主は結局どうする気なのだ？ ——守護者のように無理矢理な回避は目的に沿わんだろうしの？」

確かに不便だな……。今が両方の作品の、どの時間軸にあるのか分からないし……。

——ん？

何か嫌な予感がして、顔を上げる。

俺が顔を上げるとそこにあつたのは——

——悪戯を思いついた子供のような笑顔を浮かべた老人の顔だった。

「何を考えていらっしゃいますか……？」

俺は何か危ない雰囲気を感じ取り、尋ねる。

「御主——ワシの弟子にならんか？」

その提案をされた俺は困惑した。

「……何故、自分を弟子に？」

「何、見たところ調停者ではあるが、磨き上げられた宝玉ではない

ようだ。

——恐ろしく巨大な原石といったところか。

磨く者の腕によっては、稀代の名宝となりうるだろう。

ならば、ワシ自らの手で磨き上げるのも一興かと思ってな」

「……本当のところは？」

「……最近、退屈していてな。何かちょうどいい暇つぶしは無いか
とっていたところだったのだ」

俺はそれを聞いて、しばし考える。

確かにその通りだ……。俺には“知識”はあるが“経験”は全く
無い。

起源たる“理解”に類するものとはともかく、他に関しては教えを
誰かに教えを受けたほうがいいだろう。

魔法使いの一人である宝石翁に教えを請えるのは、“彼への弟子
入りとは即ち成功か破滅の二択”と言われていること、つまりは俺
が破滅してしまう可能性があることを差し引いても、かなりのメリ
ットがある。

「——分かりました

第二魔法の使い手、宝石翁キシュア・ゼルレッチ・シュバインオ
ーグ殿。

俺を貴方の弟子にさせていただきたい」

「うむ。承知した。

——して、御主の名はなんと言う？」

「——名前、ですか」

俺が調停者としてこの世界で目覚めた時から、俺の前世の記憶は
段々と薄れていつている。

知識はあるのだが、名前や思い出と言ったものが段々と失われい
くのだ。

既に、前世での自分の名前は思い出せない。

名前も思い出も失いたくは無い……。けどもう、両親や友達にも会えないしな。

持っけていても……辛いだけか”

今の自分は“世界”の抑止力の一つ、“調停者”。

そして、この世界での自分はプロジェクトF・A・T・Eによって生み出されたアリシア・テストロッサのクローン体。フェイト・テストロッサの兄妹。

過去は此処で切り捨てよう――

「自分の名前は……ディステイ・テストロッサです」

「ふむ。――それは本名か？」

「いえ、本名はもう思い出せません。この世界の俺は、ディステイ・テストロッサです。それでいいじゃないですか」

「――そうか。では、行くぞ。我が弟子ディステイ・テストロッサよ」

「はい、我が師父キシユア・ゼルレッチ・シュバインオーグ」

F a t e / d e s t i n y 1-1: ディステイ・テスタロッサ (後書き)

とりあえず自分の構想上、stSまで行かないと、型月方面の主人公はほぼ出てきません(例外はらっきよ)。

F a t e／d e s t i n y 1－2 ∴蒼崎青子の場合（前書き）

はい、ご都合主義入ります。

Fate／destiny 1－2：蒼崎青子の場合

「――姉の方とは初見だったな。知っているだろうが自己紹介しておこう。

ワシはキシュア・ゼルレツチ・シュバインオーグと言う」

「初めまして、宝石翁。ご存知でしょうが、蒼崎橙子と申します」

「アオコ、お前とは久しぶりだな。変わり無い様で何よりだ」

「久しぶりね、そっちも相変わらずね」

三人の男女が互いに挨拶を交わす。

「急に呼び出してすまなかったな、二人とも」

「お気になさらずに結構です」

「気にしないでいいわよ」

老人が謝罪すると、蒼いショートカットの髪をして眼鏡をした女性性が丁寧に戻し、赤いロングヘアの女性が簡単に返す。

「ですが――――まず話を聞く前に尋ねたいことがあるのですが」
「話を聞くのは良いけど――その前に訊きたいことがあるんだけど」

二人の女性が次の言葉を発したのは、ほぼ同時だった。

一瞬、二人の視線が交差し、火花が散った。

比喻などではなく、魔力がぶつかり合った結果に起こったものだ。
蒼いショートカットの女性が眼鏡を外しながら尋ねる。

「なぜコイツがここに居るのですか？」

「それはこっちのセリフ。なんで姉貴がここ居るのよ」

どうやらこの二人は恐ろしく仲が悪いらしい。

視認できそうなレベルの殺気をお互いに向かって放っている。

「お前達二人を呼んだ理由はな、お前達に鍛えて欲しい弟子がおるからだ」

「それはつまり……」

「そいつを私達の弟子にしろ、って言うこと？」

他の魔術師に自分の弟子を弟子にしろ、など言うことはかなり非常識だ。

二人の顔に驚きと若干の呆れが浮かぶのは仕方が無いだろう。

「……報酬次第では考えましょう」

「私は遠慮するわ。姉貴と一緒に何かするなんてお断り」

「お前は教えることすら出来んだろ？ お前はそういうことに全く向かないからな」

「私にだって、何も教えられないわけじゃないわよ！！」

「この間、私のところから魔眼殺しを奪っていった時に言っていた

”男の子”のことか？ お前が教育したせいで道を踏み外さなければいいが……」

「私はあの子が道を踏み外さないように教えたのよ！」

二人の返答はすぐに口論に取って代わった。

口論している二人に、宝石翁が再度問いかける。

「その弟子が”調停者”であっても、か？」

「ほう……」

「へえ……」

——調停者。魔術師でも知っている者は少なく、知っている者はその価値の大きさ故に公言などしない。

調停者は英雄になれる資質を持ちながら、何らかの外的要因によって偉業を達成する前に死んだ者達。その中でも、”世界”がその存在を欲した者のことだ。

そういう者達は死後、世界によって転生を果たす。

元からある英雄としての資質を保ち、さらに赤子という大きな伸びしろを持った状態で生まれてくる。

調停者の弟子を持った暁には、己の魔道がかなりの進歩を見せることは確実だ。

それ故に、調停者という者は魔術師にとって非常に価値が高い。

「少々、特殊な調停者ではあるがな。まあ、あの特殊さは魔術師の弟子になるには、むしろその価値を高めるものだろう」

「その特殊さとは具体的にどのようなもので？」

「私も知りたいわね」

「ふむ。……それは弟子に採ってからのお楽しみだな」

——つまり、それを知りたくば弟子に採れと。

宝石翁はそう言った。

「……分かりました。お受けいたしました。調停者とやらには興味がある」

「私もやっていいけど、何を教えるって言うわけ？ 言っとくけど、魔術を教えるのは自信が無いし、『魔法』を教えるのは論外よ？」

「トウコには基礎的な魔術と人形造り、アオコには魔力の効率的運用法や戦闘の指南だな」

「……貴方も何かしら教えるわけでしょう？」

それだけ多彩なことをやってのける才能がその者にはあると?」
「――ある。実を言えば、魔術以外の技術も鍛えようとしているからな」

「ほう――」

「お前達が協力してくれるなら、教える対価にでも教えてもらったらどうだ?」

「それは、面白そうですね」

「私も興味があるわ、それ」

言動から言って、“魔術以外の技術”とは武術などではなく、もっと別の技術なのだろう。

二人はその調停者に俄然、興味を抱いた。

「二人とも了承したと言うことでいいな?」

「はい」

「いいわよ」

「では今度、顔合わせといくか。今日は連れてきておらんのでな。予定はすぐに連絡しよう」

「分かりました」

「了解よ」

――こうして、ディスティの蒼崎姉妹への弟子入りは決まった。

「――死都殲滅に行くわよ。準備しなさい」

「……は?」

そんな会話から今回の修行内容は決定した。
全くと言っていいほど会話として成り立っていない。

——だが、こんなことはこの人に弟子入りさせられてから日常茶飯事だ。気にしていても仕方あるまい。

「死都殲滅……ですか？ 死徒殲滅ではなくて」

「死都の方よ。場所はドイツの片田舎にある、オストローデって街。なんでか知らないけど、協会のお偉方がお冠なのよ」

「……それで師匠の方にお鉢が回ってきたと」

「その通り」

「大元の死徒は——」

「魔術師あがりよ」

本来、協会は全体的に死徒を討伐するのに積極的ではない。

かなりの大物は別として、死徒として名が挙がるのは大体が魔術師あがりだ。しかも、死徒に成れるのは必然的に高位の魔術師となる。

そういう魔術師は大概、協会に太いパイプを持っていて自分の身を守っている。だから、よほど目立った動きをしなければ、協会が死徒討伐を行うことはないと言っている。

——協会のお偉方の一人に大の死徒嫌いなお方もいらっしゃるが。パイプを持っている死徒は大概、その人に情報が行く前に情報を潰す。

その協会が動くと言うことは、その死徒が派手にやり過ぎたのか、よほど珍しい研究をしていたのだろう。……まあ、もしくは協会の偉方に個人的な恨みでも買ったのかもしれない。

「期限は何時までなんですか？」

「一週間」

——俺が行くことも計算に入れて依頼してきてないか？ 協会の奴ら。いくら師匠への依頼とは言っても期限が短すぎるだろう。

この頃、師匠と共に協会の仕事をやっているせいで、俺の存在が協会内でだんだん有名になってきているらしい。

まあ、存在だけなら知られてもいいのだが……。自分の年齢や家系とかまで知られると、M A D E I N 師匠な厄介事などを始めとする、面倒なことが全部こっちに回って来そうな予感がする。

唯でさえ今現在、肉体年齢八歳、魔術師として見ると初代と言っている家系という、いい感じに魔術師達の無駄に高いプライドを刺激するような身分である。魔法使い二人と封印指定の魔術師と同時に弟子入りしているというのもあるか。

個人的には、いつもの”師匠との一対一で勝負する”という修行内容の方がいいのだが、当然ながら――――

「――――拒否権は無いわよ」

「分かってますよ……」

そう言って、俺は自分の部屋の方へ向きを変える。

「準備してきます。十五分ほどください」

「十分で済ませなさい」

「……了解です」

俺は走って自分の部屋へと向かった。

死都殲滅に行くからと言って、俺が準備する物なんてそう多くはない。

なにせ師匠の修行は毎度毎度、魔術の打ち合いに帰結するからだ。だから、師匠の修行用に用意した物をそのまま持っていけば事足りる。

必要なのは食料や衣料品、応急処置用の包帯や薬などである。

「——これくらいで十分だよな？」

<All right (十分でしょう)>

俺の問い掛けに机の上に置いた、金の台座に嵌められた黄色い三角形の宝石から答えが返る。

それを手に取り、語りかける。

「今回もよろしくな、トリシュラ」

<Yes sir>

俺が部屋を出ると、部屋のすぐ前に待っていた人物が居た。

「どうした、リニス？」

「貴方に渡しておきたいものがありまして。本当は試運転を済ませてからの方が良いのですが……」

その人物——元母さんの、今は俺の使い魔であるリニスはそう言う、小型のケースを取り出した。

「それって————”例のもの”？」

「そうです。なんとか形に出来ました」

「そうか。……ありがとな、リニス」

「いえ、私にもう一度機会をくれた貴方への恩返しにはまだ足りませんよ」

そう言いながら、リニスはケースを手渡してきた。

「トリシュラ」

<Yes sir>

そのケースをトリシュラの保管スペースに収納する。

「別に恩なんて感じなくても良いんだぞ。俺が勝手にやったことだし、それに——」

「それに？」

「——リニスは大事な家族の一員だからな」

「そう言って貰えると、嬉しいですね」

俺の言葉にリニスは、笑みを浮かべて嬉しそうな様子で応えた。

「んじゃ、行って来るよ」

「ええ、いつてらっしゃい」

俺は荷物を入れたトランクケースを持つと、表で待っているであろう師匠の下へ向かった。

SIDE リニス

リニスはデイスティを見送ると、開店準備を始めた。

自分で何かしら仕事をしたい、というリニスの要望により家を少し改築して小さな喫茶店をやっている。

少し奥まったところにあるので、来客はそこまで多くは無い。しかし、紅茶などの評判が良く、リピーターとなった客も少なくない。

「それにしても——」 ”大事な家族の一員” ですか」

テーブルを拭きながら、リニスは先ほどディステイが自分に言った言葉を口にする。

「――本当に嬉しいですね」

止める間も無く、プレシアによって何処かに転移させられてしまった子供。

あれから気にはしていたのだが、プレシアとの契約を終え、消滅しようとしている自分の前に現れた時は本当に驚いた。しかも、いきなり自分と再契約するとは思わなかった。

「あの時は本当にいきなりでしたね」

目の前に突然現れたと思ったら、すぐに契約を始めたのだ。

自分が消滅する寸前だったからのだから仕方がなかったとは言え、そういうことは了承を取ってからすべきだとリニスは思う。

まあ、そのおかげで今ここに居られるのだが……。

本当に……ディステイには感謝しなくてはならない。

「家族とは言え、”親しい仲にも礼儀あり”といいますし」

――自分が納得できるまでは、貴方に恩返しさせてもらいますよ？
リニスは、つい先ほど出発した自分の家族にそう宣言した。

「リニスー、紅茶淹れてくれなーい」

「分かりました。ちょっと待っててください」

地下に築いてある工房に続く扉から出てきた金髪の少女の声に応えると、リニスは紅茶を淹れるために厨房に入った。

ふとリニスは思う。

——今の状況は自分が望んでいたものなのではないか、と。

自分の息子と娘のような存在が居て、こんなのんびりとした日常を過ごして。

そうやって自分の現状を省みて、改めて思う。

「こんな幸せを私が独り占めするなんて勿体無いですね」

プレシア、フェイト、アルフ。あの三人にも必ずこの幸せを味わわせてあげよう。

そうリニスとは心の中で誓った。

Fate／destiny 1-2：蒼崎青子の場合（後書き）

調停者Ⅱチートオリ主、とお考えください。

んなもん弟子にしたら、魔道も進歩します。

そのおかげでかなり価値高いです。

ちなみに同じ転生でも調停者と転生者だと違いがあります。

機会があったら、本編にて描写します。無かったら、いずれ、後書きか何かで説明します。……多分

PV7500、ユニーク1500突破。

読んでくださった方ありがとうございます。

01／11 修正…青崎↓蒼崎

01／11 レベルカ様に指摘されたところをある程度修正。

F a t e / d e s t i n y 1 - 3 :: 死都 (前書き)

……あれ？

いつの間にか、この死徒殲滅の話が結構長くなってしまっている。

この後に、師父&先生も入るのに……。

どうしよう……。。

Fate／destiny 1－3：死都

「イヤッホー！ やっぱり気持ちいいわー、コレ」

「お願いだから耳元で大声を上げないでください……」

ただいまドイツの上空を絶賛飛行中である。師匠はというと、俺の背中に捕まっている状態だ。

師匠を含めて覆うようにフィールドタイプの防御魔法と認識阻害を使って飛行している。

何故こうなったのか……。それは遡ること数時間前に原因がある。

——最初は転移魔法で目的地まで飛ばうとしたのだが……。師匠から駄目出しをされた。

「何故です？ 急いで死都殲滅に向かうべきだと思いますが……」

「アンタ、そんなに正義感あふれる子だったっけ？」

いや、俺はそんな見ず知らずの人間を助けるために働こう、などというご立派で輝かしい正義感を持っていない。

……まあ、直接目の前で頼み込まれた場合には多少くらい手助けするかもしれないが。

俺が心配しているのは、そっちではなくて——

「……期限、一週間しかないんでしょう？」

「問題ないでしょ。私とアンタなら三、四日で死都ぐらい殲滅できるわよ」

「……師匠は余裕を持ってことをなす、ということを知った方がいいと思います」

「アンタは余裕を持ち過ぎなのよ」

……そうなのだろうか。確かに期限の半分を目標にやって、後は手直しに使う性質ではあるが……。

今回は協会への報告や事後処理などもあるのだから、早めに終わらせるに越したことは無いと思うのだが。

「……まあ、いいです。それで……死都殲滅を急がない具体的な理由を教えてください」

「その死徒ってのが、結構な大物なのよ。死徒二十七祖には入っていないけど、空席が出たら入る候補には入ってくるくらいいの」

「死徒二十七祖の補欠ってことですか？」

「そうゆーこと。そんな大物なもんだから、聖堂教会が出張ってこようとしているんだけど……」

それなら、尚のこと急ぐべきではないだろうか？

協会としては教会に獲物を獲られるわけにはいくまい。

「”なら、尚のこと急げ”って？ 甘いわね、ディステイ」

「……どうゆうことですか？」

「使えるものは何でも使うってことよ」

使えるもの……この場合だと聖堂教会がそれなんだろう。

問題はどよう使うのか、ってことだよな。

教会に先手を譲って協会の利益に繋がることね……。

「……当て馬にでも使うつもりですか？」

「そゆこと」

「つまりは——それだけ危険な相手、ってことですよね」

「そうとも言えるわね」

協会が教会に先手を譲るという時点でかなりおかしい。

「当て馬に使うとしても、”聖堂教会では討ち取れない”と確信していないければやらないだろう。」

つまり、今回の死徒は”聖堂教会が出張ってくるほどの大物”かつ”協会が教会では討ち取れないと確信している実力者”だということだ。

「行くのが憂鬱になってきました……」

「今から言ったって遅いわよ」

——もつと前に言ったって遅いでしょうに。この話をされた時点でもう遅いのだから。

俺は少々、憂鬱な気分になりながらオストローデに向かって飛ぶ。

「トリシュラ、後どれくらいだ？」

<If this rate is about one hour later. I'll get to where the searcher? (この速度なら、あと一時間ほどもです。サーチャーを先行させますか?)>

「ああ、頼む」

<Yes sir>

俺は手に持ったトリシュラに指示を出す。

今俺の手の中にあるトリシュラは、三叉槍の形状をしている。

このトリシュラは俺と姉さん、リニスと師父、先生の総勢五人で趣向を凝らして作ったデバイスだ。……約一名、除け者にされているのは気にしてはいけない。

一応、インテリジェンスデバイスに分類されるのだが、主に姉さんと先生の拘りによりアームドデバイス並な強度のフレームを有する。

基本形態は漆黒の三叉槍だ。三本の刃の根元には金色のデバイスコア、その下にはリボルバー式のカートリッジシステムが取り付けられている。このデザインはリニスが非常に拘った。

そして、トリシユラは魔術礼装としても機能する。これは俺と師父の拘りだ。……ついでに横で見物していた師匠も拘った。

素材、デザイン、機能全てに一切妥協をしていないで造られた、何処に出しても恥ずかしくない、俺達謹製のデバイスだ。

<Searcher has reached its destination (サーチャーの到達を確認)>
「映像を出してくれ」

斜め前方にモニターが現れ、サーチャーからの映像を表示した。映像は上空からの視点で街全体を映している。そこまで大きい街ではないが、別に町と言うほど小さいわけでもないぐらいの街だ。

「死徒が居るとしたら、何処だと思います？」

「うーん……。やっぱり、あの一番大きな屋敷じゃない？」

「師匠もそう思いますか」

街の中心から少し外れたところに大きな屋敷が建っている。

俺も死徒が居るならそこだろうと思った。

「だって、魔術師って言えばでっかい屋敷か城って相場が決まって

るでしょ」

「――魔術師の住処って、なんでワンパターンなんででしょう？」

「昔からの伝統、ってヤツよ」

魔術師は基本的に貴族みたいな（本物の貴族もいるが）考え方を
するんだよな。

まあ……、貴族以上に血統と土地に左右されたりする生き物だから仕方ないかもしれないけど。

そんなことを考えていた俺の眼にある光景が映った。

「ん？ あれが教会の人間ですかね？」

「んー、どれかしら」

「ほら、あの街の入り口辺りにいる人達」

「それっぽいわね」

街の前に僧衣を来た男が数名立っていた。

そこまでなら一般人と見分けがつかない。だが、さすがに全員が僧衣の上からでも分かるほど筋隆々としているのでは一般人に見えない。

「ってことは、あの周りのは死徒側の刺客でしょうか」

「うーん……そうみたいね。なんか気持悪いくらいに無表情だし」

彼らから少し離れたところに、妙に無表情な顔で彼らを観察している少女の姿が見て取れる。

その無表情は”物静か”という感じではなく、むしろ”仮面”を着けているかのように感じられた。

着ているのが軽装な上に武装はしていないようだから、監視か何かのような気がする。

それにしても、少し出遅れてしまったかな。本当なら肉眼での観

察もしたかったけど。

俺がそんなことを考えていると、少女が路地裏の方へと消えた。どうやら、代行者達も少女が死徒に関係があることを見抜いていたらしい。一人がその少女の後を追う。

俺はサーチャーをそちらに向かわせる。

——さて、どうなるだろうかね。

代行者は上空からの監視には気付かず、先ほど自分達を監視していた少女が消えた路地裏に入った。

彼の目に路地裏の向こう側で少女が大通りに出て行くのが見えた。

「小癪な……」

——人ごみに紛れて逃げ切るつもりなのだろう。

代行者はそう考えながらも、少女の後を追う。

大通りに出て見渡すと人ごみの中に一瞬、少女の姿が見えた。普通なら見逃してしまうような状態だが、代行者の優れた動体視力はそれをしっかりと捉えていた。

人ごみを器用に抜け、少女を追跡する。

しばらくすると、逃走していた少女が急に立ち止まる。

——逃げるのを諦めたか……？

代行者がそう考えた時だった。

——彼が己の胸を貫かれたのは……。

本当に突然だった。気配も何もなく後ろから胸を一突きにされたのだ。

代行者は最期の力を振り絞って、首を後ろに向ける。

——その彼の目に映ったのは、こちらを無機質な目線で見つめる何十ものガラス玉の瞳だった。

「……人………形……だと………」

そう————周りにいた人間だと思ったものは全て人形だったのだ。

つまり、あの少女は逃げていたのではなく———

———この場所へ誘い込んでいたのだ。

代行者は顔を驚愕の色に染めながら、永遠の眠りについた。

「こんなところに姉貴の同類がいるとはねー。……ん？ どうしたの、ディスティ。そんな難しそうな顔して」

「——師匠。あれは……」人形”じゃありません」

「どういうこと？」

「あれは言うなれば”剥製”です」

あれは”人形”ではない。あれを”人形”などと呼んだら、俺は先生に殺される。

魔術において人形を造るというのは大体、人間以外のものを材料にして人間に近いものを造り上げることを言う。

あれは人間を加工して作られた”剥製”だ。

しかも――――

「――――性質の悪いことに、あの人達……多分まだ生きてます」

確かにそうした方が人間らしい動きをさせられるだろう。

だが、気持ちのいいものではない。……これから戦う側としても。

「気に入らないわね。全く、どうせなら殺して死者にでもすればいいのに」

「魔術師としては……まあ、間違っちゃいないんでしょうけど……」

実際、“研究として”ならかなりの成果だろう。こちらからでも、直前まで気づかなかったぐらいなのだから。

魔術協会の基本方針は、言ってしまうえば“ばれなきや、何をやってもいい”に近い。

これで、ここが死都でなかったら、おそらくは――この依頼に個人的な怨恨が含まれていたら違うかもしれないが――協会も何も言わないだろう。

俺だって魔術師だ。それが解らないわけではない。だが――――
――――どうしても納得はできない。

そう思いながらサーチャーを残りの代行者の方へと向かわせた。

俺と師匠は街の近くにある森の中に降り立った。

あの後、結局は他の代行者達も死徒配下の”剥製”達にやられていった。しかも”剥製”達はかなりの数に上るようだ。

――これはかなり厄介そうだ。

俺はそう感じた。

一応、サーチャーでの監視は続けている。
モニターを確認すると、一人の大きな荷物を背負った人影が街に入ろうとしているところだった。
何の用事なのかは知らないが、こんな時刻にあの街に入るとは運が無い――

「――あれ？」

「ん、どうかした？」

「あれって人払い、ですかね」

「へ？」

その人影は街に入る直前で突然踵を返し、来た道を帰っていった。
――まるで、もうこの町に用は無い、とでも言うように。明らかに不自然だ。

サーチャーを近づけてみるが、こちらに気付いた様子はない。どうやら一般人のようだ。

「トリシュラ、広域魔力サーチを」

<Yes sir>

新しいモニターが現れる。

表示されたのはサーモグラフィのような画面だ。

膜状に街全体を覆っている魔力の存在を表す表示がなされている。

「……随分、親切な死徒ですね」

「……そうね。何のつもりなのかしら？」

「どうしますか？ この様子だと、人払いだけとは思いませんよ」

人払いだけにしては、観測された魔力の値が大きい。

迎撃……とまではいなくても、侵入感知ぐらいの機能はあるだろう。

そして、隠密性を優先した魔力サーチでは表面上の魔力しか感知できない。なので、相手に気付かれずに街の内部を探るのはこの辺りが限界だ。

「……仕方ないわね。ちょっと気になるけど、いつも通りでいきましょ」

「了解です」

「じゃ、結構は明日ってことで。さっさと休みましょ」

「トリシュラ、保護と隠蔽用の結界を」

<Yes sir. Comfortable Field and Hide Field expand（了解。保護結界と隠蔽結界を展開します）>

二つの結界を俺と師匠の周りに展開する。

結界が張られると、途端に周りの温度が暖くなった。そして、辺りから動物の気配が消える。

保護結界は予め設定してある快適な環境を結界内に作り出す結界。野宿とかの際はかなり重宝する。

隠蔽結界は人払いと認識阻害を組み合わせた結界だ。封時結界ならもつといい効果が得られるのだが、ある程度の実力を持った魔導師や魔術師相手だと張られていることは丸分かりになってしまうのでこちらをチョイスした。

結界が張られると、師匠は比較的乾いたところに寝転がって、すぐに寝てしまった。襲われたとしたら、すぐに起きられるだろうけど。

「トリシュラ、周囲の警戒を頼んだ」

<Yes sir>

——さつさと終わらせて帰りたいな。
そう思いながら、俺は浅い眠りについた。

Fate／destiny 1-3：死都（後書き）

PV17000、ユニーク3200突破。本当にありがとうございます！！

死徒さんは次で出てきます。人払いの意味も多分そこで。

自分の拙い文章力で戦闘描写をちゃんと書けるのだろうか。

……書けないだろうな。

設定についてはある程度は見逃してください。

まあ、よほどまずい設定の食い違いが起きた場合は………書き直すしかないのかな……。

F a t e / d e s t i n y 1－4：死徒、ネグアリフ（前書き）

P V 2 7 0 0 0、ユニーク5000突破。

皆さん読んでくださり、ありがとうございます。

これから更に設定の矛盾とかが出てくると思います。
ご了承の上で読みください。

Fate／destiny 1－4：死徒、ネグアリフ

「これで、ようやく前準備は終わりか……」

薄暗い部屋の中で一人の男が呟いた。

彼はその美しい、と表現していい顔にうつすらと笑みを浮かべていた。

「初めは……道楽のつもりだったのだがな」

この部屋には彼以外に、誰かが居るような気配は無い。

——男の独白は続く。

「いつの頃からだったのかは知れぬが……私は君に恋していたのだよ」

男は長年の恋人に告白するように言った。

彼の前には——美しい女がいた。

その女からは呼吸の気配も心臓の鼓動も、およそ”生命の気配”というものが感じられない。

——それも当然だろう。その女は——

——人形なのだから……。

——ここに到るまでとてつもない時間を要した。

オステローデに死都を築いた死徒、ネグアリフはそう回想する。
死徒になる前、彼が優秀な魔術師として名を馳せていた頃。

その頃から彼には”根源への到達”という魔術師の至上命題とも言えるものに対する、情熱……あるいは執念と言うべきものがいまいち不足していた。名門であった実家の”貴族としての誇り”とやらも理解できても、納得するまでに至らなかった。

「——才能に血筋など関係が無い。

世に言う”天才”という者はそうあるべくして”天才”なのだ。
血筋に拘って、その才能を潰すとは————実に愚かしい」

ネグアリフが歴史の浅い血筋の者を弟子に採った時、反対する周りの者達に彼はそう言った。

その弟子は少し後に彼の元を去ったが……彼は咎めもしなかった。
そのことを次の日くらいには忘れたぐらいだ。

——ネグアリフはどうしても何かしらに対する”拘り”というものが持てなかったのだ。

そんな彼を変えたのは、この人形との出会いだった。

それは協会からの依頼で、在野の魔術師を討伐した時のことだ。

その魔術師は常に魔術回路を起動させ、見たことの無い民族衣装を纏い、魔術を使うたび色鮮やかな魔術陣を展開する魔術師らしくない相手だった。

話によると、その人形を貴重な魔術品と気づいた別の魔術師と奪い合いになり、その際に大々的に魔術を使っておきながら事後処理をしなかったそうだ。

ネグアリフはすぐにその魔術師を発見することが出来た。

常に魔術回路を起動させた魔術師が同じ町の中に居れば、彼ほどの魔術師に発見できないはずは無い。

——むしろ、見つけた後が問題だった。

強力な防御魔術を使ってきた上に、小動物——イタチか何かのようだった——に変身するなど梃子摺らされた。

ネグアリフがその魔術師を倒せたのは偶然に近かった。

いきなりその魔術師が苦しみだしたかと思うと————その魔術師の体は”枯れた”。

木が枯れるのを高速で見ているかのように痩せ細っていった。

後に残っていたのは文字通りの骨と皮だけの状態となった魔術師の死体と小さな赤い種、そして件の人形だけ。

その人形を見た時、ネグアリフの心は完全に魅せられた。

——こんな美しい人形がこの世に存在するのか。

何の誇張も無く、ネグアリフはそう感じた————そして同時に、何故この女が人形なのだろう、とも。

彼は自分の伝手を存分に使い、その人形を自分の手の内に入れた。もう一つの戦利品である赤い種も、一応——あの魔術師の身に起きたことが気になったため——手に入れた。

ネグアリフはそれ以来、今まであまり熱心とは言えなかった『魔法』の習得に精を出し始めた。

——ネグアリフが目指したのは『無の否定』……彼の家が先祖代

々研究してきたものだ。

先祖達が辿り着けず、自分もまた辿り着けるはずもないと思っていた『魔法』。

どれだけ困難なものか、そんなことは分かりきっている。

……圧倒的に時間が足りなかった。

それを打破する為に死徒になり。

この赤い種が持つ神秘に気づき。

その神秘を活かすためにこの舞台を用意した。

「―――全ては貴女のために……」

ネグアリフが『魔法』を求めた理由も、死都を築いた理由も全ては”この人形のため”……そこに集約する。

赤い種の神秘も、この死都であれば存分にその力を発揮するだろう。

その神秘が最大の力を発揮した時―――それが、ネグアリフの願いが叶う時だ。

「だが―――油断は出来ないな」

ネグアリフは気を抜かない。

今日は代行者の侵入が感知された。

当然、協会にも情報が行っていると見たほうがいいだろう。

―――警戒を怠るわけにはいかない。

「今、この街に入られるのは困るからな」

儀式はこれから最終段階に入る。

たとえ高位の魔術師が侵入してきても、何か問題があるわけではないが————長年の夢だ……万全の態勢で挑みたい。

ネグアリフは必要最低限の数を除いた”剥製”達を街の郊外へと向かわせる。

——さあ……儀式を始めよう……！

俺は師匠と別れ、オステローデ上空に来ていた。

「こっちは準備万端よ。そっちは？」

「大丈夫です。ただ……”剥製”が郊外に向かって移動しているみたいです。」

一応、気をつけてください」

師匠が持つ簡易デバイス——収納、通信などの機能しかない——から連絡が来る。

上空から見ていた限り、”剥製”の一部が郊外に向けて移動を開始していた。

そのことを師匠に伝えておく。

「問題ないわ。むしろ、そっちの方が好都合でしょ」

「そうですね。いつも通りの展開ですし」

「——ん、こっちでも”剥製”が確認できた。」

……んじゃ、始めましょうか」

「了解です」

その直後————遠くで爆発音が鳴り響いた。
師匠が暴れ始めたようだ。

「さて、こっちも行きますか」

理解の魔眼——実際には直死の魔眼同様、脳のほうが重要なのだが——を使い、転移先の座標を『理解』する。

転移魔法が発動に時間がかかるのは、幾重もの安全装置が施されているからだ。

特に座標の演算には途中、何回も確認作業が行われるようになってる。

——だが、座標をあらかじめ『理解』してしまえばどうだろう？
発動時間の大幅な短縮が、安全性を確保した上で可能となるのだ。
師匠が攪乱している間に、俺が高速転移で前触れ無く相手を強襲する。それが師匠と俺が組む時の常套手段。

俺は転移魔法を使い、工房と予想される屋敷の前に転移する。

「ッ!？」

転移した途端————違和感が悪寒となって背筋に走る。

「これは————工房、なんてレベルじゃないぞ……」

工房などと言うには生温い————”異界”の感触。

「神殿……それも街を覆うほどの大きさって……」

しかも、中に入るまでほとんど違和感をほとんど感じなかった……

——馬鹿げてる。なんでこんな奴が二十七祖に数えられていないんだ。

俺は目の前の工房と思われた屋敷に目を向ける。
理解の魔眼を使うまでも無い……周りとは一線を隔す違和感。

——ここが異界の中心だ。

「師匠……聞こえますか？」

返事は————無い。

どうやら、ミッド式の念話も届かなくなったようだ。

<Sir>

「どうした、トリシュラ」

<Not at all change around magic

c (周囲のマナが全く変動をしていません)>

「……なんだと？」

自然界に存在するマナは常に変動している。

それは季節の移ろいや天体の動きなどがあるのだから、当然といえば当然だろう。

その変動が全く無い。それはつまり——

「何かしらの儀式が始まっているということか……」

——何者かが手を加えている、ということだ。

俺はトリシュラを握りなおす。

「戦略的撤退————と行きたいところなんだけどな……」

どこまで儀式的の範囲にはいるのか——つまり、どこまで逃げれば安全か分らないし……。何より———

「——やり始めたことを投げ出す、っていうのはどうもな」

<I think you better go away(あなたはそのままが良いと思います)>

「ありがとな、トリシュラ」

一度、やり始めたのなら、関わったのなら———最後まで責任持つのが筋だろう。

少なくとも……俺はそう思っている。

———さあ……闘争を始めよう……！

「まさか、”魔法使い”とはな……」

ネグアリフは呟く。

瞑られた瞳。そのまぶたの裏には視覚を共有した剥製の見ているものが鮮明に映し出されている。

その視界の中で繰り広げられるのは、一方的な”殲滅戦”。彼が作った”剥製”達が相手に傷一つ付けられず、次々に屠られていく。

だが———ネグアリフの顔に焦燥は無い。

「そちらは手数と魔力の運用効率が売りのようだが……」。

「こちら物量でなら負ける気は無いぞ」

”剥製”達は十二分に用意してある。

儀式が終わるまでの間、彼女を足止めするには十分だろう。

それより問題は——もう一人の方だろう。

「——Selection（術式選定）， Realize（術式具現）……Startup（術式起動）」

魔術回路を起動させ、術式を描く。

俺の十八番、『具現』——魔術師なら誰でも使える、魔力で物の内部に呪刻したりするための魔術を改良したものだ。

描いて固定化させた術式に魔力を通し、魔術を行使する。

「これで少しは儀式の妨害が出来ればいいんだが……」

さっきから幾つか施しているこの術式は周囲の魔力の流れを誘導するものだ。

ちよっと前から、この工房の地下に向かって魔力が流れていつている。

儀式のせいだというのは分かりきっているから、ちよっと方向を変えて上に魔力を逃がしているのだ。

だが——

「あんまり期待しない方が良いな」

——所詮は焼け石に水だ。

逸らしている魔力と流れこんでいる魔力を比べれば、流れ込んで

いる魔力の方がかなり多い。

時間稼ぎぐらいは………出来てほしいが。

「さっさと本人を倒さないとな」

それにしても外見は普通の屋敷なのに、中身はまるで迷宮のようだ。

このままだと折角の時間稼ぎも無駄になってしまう。
サーチャーも放つてあるが………あまり当てに出来そうも無い。
さっきから何度も潰されている。

「しょうがない……使うか……」

俺は理解の魔眼で道順を『理解』しようとして――――

<Please stop it (それを使うのはやめてください)>

――――トリシュラに止められた。

「……なんで止めるんだ、トリシュラ」

<There is no need to use (使う必要がありません)>

トリシュラが言うと同時にモニターが展開される。

どうやら、先行させておいたサーチャーの一つが罠を抜けてルートを見つけたらしい。

運が良いな。やっぱりこんな大きいものに『理解』を使いたくはない。

下手に深い深度で『理解』を使ったら“呑まれる”可能性もある。

——柄にも無く焦っていたらしいな。いつもなら、こんなすぐに理解の魔眼を使おうなんて考えないんだけど……。

俺は少し自分の焦り具合に疑問を抱きながら、トリシユラに教えられたルート通りに迷宮を進んでいった。

「あの魔術師と同門の者か……？」

ネグアリフは工房の各所に存在する監視用の仕掛けが捉えた、侵入者が使う魔術を見て疑問を口にした。

侵入者が放った光球には見覚えがある。

人形を所持していた魔術師も使っていたものだ。

おそらく、機能も同じようなものだろう。さきほど光球がこちらへの道を発見したすぐ後、侵入者はこちらに向かっている。

「……急がねばらんか」

ネグアリフは目の前の物体に目を向ける。

それは————巨大な赤い種。

規則正しく鼓動しており——その色も相まって——まるで巨大な心臓のようにも見える。

「進行中の全工程の内、必要最低限のものを除き中断。

——これより、最終段階に入る」

その言葉と共に、部屋の床一面に描かれた魔法陣が輝きだす。
そして……赤い種が一際大きく鼓動した。

まるで歓喜しているかの様に————鼓動のペースを上げていく。

「もう少し……もう少しだ………。」

もう少して私の願いが叶う………」

ネグアリフの顔もまた————種と同じように歓喜に彩られていた。

Fate／destiny 1－4：死徒、ネグアリフ（後書き）

ネグアリフさんはかなり優秀な方ですね。

彼が討伐した魔術師……まあ、あからさまですよね。

……というか、彼の話がここまで長くなるとは思わなかった。

Fate／destiny 1－5：“心臓”

——街を歩いていた女性が、いきなり倒れこむ。

——元氣良く遊んでいた子供達が、急に静かになりうずくまる。

——ベンチに座っていた老人の体が傾いていき、そのまま横たわる。

ディスティが突入した屋敷——死徒の工房を中心に街に異常が広がっていく。

変調を起こした住人達に更なる異変が起こる。

段々と……その体が痩せ細っていく。

苦しみの声を上げることすら出来ずに、彼らは“枯れていく”……

俺はバリアジャケット——黒いライダースーツと黒いマントだ。

当初はライダースーツだけだったのだが、リニスの希望により黒のマントも追加された——を展開して、薄暗い通路をひたすらに地下に向かって飛行しながら進んでいく。

どうやら死徒はかなり深い位置に居るようだ。

「全く————嫌な予感しかないぞ……この状況」

地下から感じる魔力がどんどん増大している。

かなり大掛かりな儀式を行おうとしているのは明らかだ。
それに――

「――なんか、魔力から禍々しい気配がすると言うか……」

まるで魔力が怨嗟の声を上げているようにも感じられる。

それが地下へと殺到している様は仇敵を目の前にした復讐者のようだ。

――本当に嫌な予感しかないな。

負の意思が籠もった魔力は、死徒がやろうとしていることの碌でも無さを感じさせると同時に、死徒の魔術に対する造詣の深さも感じさせる。

これほどの技量を持った死徒を相手にするのは骨が折れるだろう。

「――儀式に掛かりつきりになっていると良いんだが……」

俺は飛行スピードを一段上げて、地下へと進んでいく。

ネグアリフの目の前では、赤い種がその鼓動をますます激しくさせていた。

彼の顔には余裕というものが全く見えない。

――それもそのはずだ……今、彼が行っている作業は非常に繊細な技術が必要とするのだから。

この赤い種は周囲の魂を喰らい、それを魔力へと変換することで膨大な魔力を溜め込むことが出来る代物だ。

——しかし、確かにこの魔術品は、膨大な魔力を取り込み蓄積出来るのだが、本来はある一定の容量を満たすと、何かしらの方法で消費されるらしい。

それがネグアリフが研究の末に知ったことだった。

度重なる解析の結果から、その効果が判明したのだ。

溜め込まれた魔力が“何のために消費されるのか”までは彼を以ってして知ることとは出来なかった。

ただ、そういう機能を持っているぐらいしか分からなかった。

——だが、ネグアリフにはそれで十分だった。

理由など、どうせは“根源への到達”に繋がると推測し気にしなかった。

彼が目をつけたのは、その魔力の貯蔵量だ。

消費されるボーダーラインは魔力の最大貯蔵量の遥かに下だった。

——魔術による制御によって、魔力が消費されることを阻止する、もしくは抑制できれば……私の目的も果たせるのではないだろうか？

そこから数十年。ネグアリフは制御魔術の開発に没頭した。

元々、魔術には魔力の誘導や制御といった効果を持つものが多い。未熟な魔術師を育てるのには必須の技術なためなのだが、ここでネグアリフが血筋の分け隔てなく多くの弟子を育てていたことが功

を奏した。

——才能があっても、実験中などに魔術回路を暴走させてしまう魔術師は少なくない。

ネグアリフは採った弟子——つまりは自分の身内——の面倒見は他の魔術師と同じくらいには良かった。

当然、そういう弟子の世話をする過程で魔力の制御に関しては経験豊富だ。

その経験と持ち前の知識を持ってすれば、術式の開発は不可能ではなかった。

無論、そう簡単な術式ではない。だからこそ万全を期すために、ネグアリフはこの死徒に巨大な神殿を築き、人払いまで行ってから儀式を始めたのだ。

「——……さあ、もうすぐだ。もうすぐ魔力が溜まり、私の悲願が成就する……！」

現在、周囲から吸収させている魂は、今まで溜め込んだ魔力を一気に開放するための起爆剤代わりだ。

起爆剤にする分の魂が魔力へと変換された時。

その時こそ————ネグアリフが恋した人形に魂が宿るときだ。ネグアリフ自身も、興奮を隠し切れない様子で儀式を進めていた。そんな時だった——

「それは少し困るんだよ……ここらで終わりにしてもらおうか？」

——背中走る衝撃と共に、その言葉が彼に届いたのは。

最下層に着いた俺の目に映ったのは巨大な心臓だった。

血よりも濃い、禍々しい赤色をしたソレは恐ろしく大きい……軽く二メートルを越すソレの近くには、一人の男が立っている。

その男——十中八九、件の死徒だろう——が言葉を発した。

「——……さあ、もうすぐだ。もうすぐ魔力が溜まり、私の悲願が成就する……！」

どうやら、相当にまずい状況のようだ……。

死徒が行おうとしている儀式は最終段階に入っているらしい。

儀式に気を取られているのか、死徒はこちらに気付いていない。ならば——

「フォトンニードル……」

<Photon needle Fire>

——先手必勝だ。

俺の元から金色の針が数十本、一斉に射出される。

「それは少し困るんだよ……ここらで終わりにしてもらおうか？」

そんな言葉を投げつつ、俺自身もトリシュラを構えて突撃をかけた。

フォトンニードル——俺が開発した、速射性と貫通性重視の射撃魔法だ。威力に関してはほぼ度外視しているから、死徒なら心臓などに中らなければ殺傷設定でも死ぬことはない——が着弾する。

『電気』へ変換された魔力が相手の体に走った。

その直後、俺が構えたトリシュラの切っ先も死徒を捉えようとする。

死徒も体を捻り、その切っ先から逃れようとした。

だが、先ほどの電流の影響で動きが鈍り、三叉槍の左右の刃の片方が脇腹に突き刺さる。

俺はすぐにトリシユラを抜き取り、後退して距離を取る。

——次の瞬間、さっきまで俺が居たところの床が爆発した。

さすがは死徒。あのくらいの負傷では死なない。

しかも、すぐに反撃までしてきた。

後ちよつと、後退が遅れたら今の一撃を食らっていたところだ。

「——もう幾分かは工房の設備で足止めが出来る、と思っていたのだがな……」

「まあ、こつちも訳の分からない儀式をやられると困るんな。

ちよつとした裏技を使わせてもらった」

——とは言っても、トリシユラに発見させた罠を転移でやり過ごして来ただけだけど。

こう言っておいた方が、隠し玉があるように思わせられるだろう。こんな、嫌な予感はかなり感じられる儀式を行われたら何が起きるか分かったもんじゃない。

相手の動きを制限できるなら、しておくに越したことは無い。

「それに……その魔術。貴様、マリアンヌを取り戻しに来たのか？」

死徒は巨大な心臓、そしてその奥の人形と俺の間に立ち、こちらに尋ねてきた。

「マリアンヌ？」

「あの人形の名だ……もうすぐ、一人の人間となるがな」

……今、かなり重要なことを聞いた気がする。

——“もうすぐ、一人の人間となる”。

つまり、この死徒の目的はあの人形に魂を宿すこと。

それも、おそらくは一から創ったものを……。

「お前の目的は『無の否定』……か？」

「その通り。私の手で彼女の魂を創り出し、新たな生命として生み出すのだ」

うわ……本気で人形に恋してる目だ。

そういえば……姉さんが渾身の使い魔の作成に成功した後しばらく、同じような目をしていたな……。

——って、そんな関係無いことを考えてる場合じゃない。

死徒の具体的な目的は分からないが——

「——とりあえず、お前の儀式は止めさせてもらう」

「そうはいかない。私の長年に渡る悲願だ……こんなところで諦めるのか！」

金色の針と漆黒の三叉槍が高速でネグアリフを襲い、それを周囲の術式とネグアリフの下から放たれた幾多の魔弾が迎撃する。

なお懐に入り込もうとするディスティを頑丈な床を容易く粉碎する拳が襲い、それを避けるディスティの下から金色の針が発射される。

「……貴様は奪われた人形を取り戻しに来たのではないのか？」

「そんな人形に興味は……あるっちゃあるが、そんなに拘るようなもんじゃない。

むしろ、何でお前が俺が“人形”を取り戻しに来たと思ったのか訊きたいね」

二人は戦っているが、会話を交わしている。

二人とも、ただ会話している訳ではない。腹の探り合いをしているのだ。

ディスティは儀式の詳細を。ネグアリフはディスティの素性を。それぞれ、会話の中から拾い上げようとしている。

「あの人形を所持していた魔術師は、貴様と同じ体系の魔術を使っていた。

あの魔術師は貴様と同門の者ではないのか？」

この会話の意図は、腹の探りあいだけではない。

互いに、僅かでも相手に隙が出来ることを期待してのものでもある。

「……さあ？　うちの魔術はマイナーな割りに同門の奴が多いんでね。

具体的な特徴でも言ってもらわなきゃ、俺の関係者かどうかなん

て分からないね」

「ふむ。特徴と言えば……イタチか何かに姿を変えていたな」

その特徴を聞くと、デイスティは眉を顰めた。

——イタチ、ってまさかスクライアの変身魔法か？

確かにフェレットはイタチの仲間だが……。

となると……あの後ろの“心臓”と“人形”はロストログアか……？

デイスティは与えられた情報から、死徒が儀式の要であろう二つの魔術品の正体を推測する。

「あー……そりやおそらく、遺跡発掘専門の奴らだな。

迷惑をかけたようなら一応、謝罪しておくよ」

覚えがあるような反応をしたことを不自然に思われぬよう、デイスティは当たり障りの無い答えをネグアリフに返した。

この答えから次元世界のことを知られるようなことは無いだろう。

「……ならば、謝罪ついでにこのまま引いてほしいのだがな」

「それはそれ、これはこれ、だ。俺がこの儀式を止めるのに変わりはない。

今投げ出すと、協会からの信用を失う可能性もあるし」

ネグアリフの提案をデイスティは一蹴した。

あまり期待はしていなかったようで、ネグアリフもあまり残念そうには見えない。

——ここまで二人は互角の戦いを続けている。

——ネグアリフは生前は研究者寄りの魔術師だった。

だが、戦闘が出来ない訳ではない。

むしろ、平均的な魔術師に比べても高い戦闘力を誇っていた。

それに加えて、両キョウカイの追手などを退けつつ研究を続けていたのだ。

その実力は一流と言って差し支えない。

——ディスティはどちらかと言えば、戦闘者寄りの魔術師だ。

ミッド式魔法なども習得しているのだから、総合的に見れば明らかに戦闘者だろう。

魔術師という括りの中では、上位に食い込む戦闘力があると言っている。

それに加えて“魔法使い”二人に高位の魔術師一人。その三人に毎日に近い頻度で扱われているのだ。

その実力は一流と言って差し支えない。

実力的にはほぼ同等。

故に、彼らの勝敗を決するのは……僅かな隙や負傷だ。

ネグアリフは先ほどのディスティが行った奇襲によって、脇腹に傷を負っている。

——段々と、形勢はディスティの方に傾き始めた。

「ぐっ！」

ネグアリフは背中から襲ってきた金色の針を避け切れず、何本かをその身に受けた。

そして、身体に走った電流のせいで動きが止まる。

「はぁっ!!」

その隙を見逃さず、黒衣の魔術師が素早く槍を突き出してくる。死徒であるネグアリフも、さすがに避けきれなかった。

——ネグアリフの心臓を漆黒の三叉槍が貫く。

「がぁっ……!!」

ネグアリフは心臓を貫かれた感触をどこか遠くに感じながら、な
お思考する。

——もう少しだった。もう少し、だったのだ。

後僅かな量の魔力が溜まれば、彼の悲願は叶っていた。
最初から出来ないのなら、まだ良かった。だが——

——なんと、口惜しい……。

——あと少し。目前にまで伸びた手。それをを横から叩き落とされた絶望は実に大きい。

今とて、目指した光は見えているのだ。

ただ——己の身体はもう動かない。

——“天才”、か……。

己の持論——世に言う“天才”という者はそうあるべくして“天才”である——が正しかったことをネグアリフは改めて実感した。何せ、自分をここまで追い詰めた魔術師は幼い。もしかしたら、自分と同じく死徒なのかも知れないが……この年齢でそこまで達している時点で“天才”だろう。

——この身も……この“天才”には敵わぬか……。

ネグアリフとて才能はあった。

生前、彼は周囲から“天才”と持て囃された。それだけの才能はあった、と彼も自負していた。

だが、そのネグアリフを以ってして、この者には敵わなかったのだ。

胸の傷から血が流れ続け、ネグアリフの意識は段々と無くなっていく。

だが——

絶望に染まったネグアリフの脳裏にある閃きが生まれた。

——そうだ……これならば……彼女を目覚めさせられるやも

知れない。

そう考えたネグアリフの口元に凄惨な笑みが浮かぶ。
彼は己の閃きを形にすべく、魔術を行使する。

——ネグアリフの眼に光が宿った。

俺は最初と同様、貫いた切っ先をすぐに抜き後退する。
死徒はその場に倒れ、立ち上がろうとする気配は無い。

「トリシュラ、反応は？」

<there are still reactive (微弱です
が反応があります)>

——だが、完全に滅びるまで油断は出来ない。

そう考え、俺が慎重に死徒に近づいていった時だった。

「——」

俺の耳に死徒が発した何かしらの呪文が届いた。
半ば反射的に後ろに跳ぶ。

直後、死徒の身体に変化が起きた。

見る間にその身体から肉が落ち、痩せ細っていく。

まるで植物が枯れる様を早送りで見ているかのように……。

「なんだ……？」

そう俺が疑問を口に出した時だった。
死徒の奥にあった心臓が力強く、そして早く鼓動する。

<Defensor>

「く……」

トリシュラが防御魔法を展開する。

俺の身体は強大な魔力の波動に襲われた。

その波動は心臓が鼓動するたび、周囲に放たれている。

心臓は異様な威圧感を醸し出し始めていた。

——何が起こってるって言うんだよ……。

俺がそう思った時だ。

——ゴトツ

赤い心臓のさらに奥で物音がした。

それと同時に、心臓が収縮していく。

だが————その威圧感は少しも衰えていない。むしろ……その威圧感を増していつている。

体積を減じた心臓の向こう。

そこに一人の女が立っていた。

——ちょっと待て。なんであの“人形”が動いている……？

俺が見たものは、明らかに不自然だった

そう、動いていたのは死徒が人間にしようとしていた“人形”だったのだ。

そもそも……あの死徒は“人形”を目覚めさせるために、今回の事件を起こしたのでなかったのだろうか。それはすなわち、“人形”がそのままでは目覚めないことを証明するはずだ。

なのに何故……あの“人形”は動いているのだろうか。

俺が驚きに固まっている間に“人形”は小さくなった心臓の前に近づいていた。

それを見た俺の頭に、嫌な想像が過ぎる。

——まさか、あの心臓は……。

——あの“人形”の心臓なのではないのだろうか。

「トリシュラ!!」

<S o n i c M o v e>

高速で“人形”に突撃する。

俺の想像が当たっているにしろ、当たっていないにしろ、あの“人形”を心臓から離せば問題ないはずだ。

だが——

「く……」

——心臓から放たれた、先ほどよりも更に強大な魔力の波動によって俺の突撃は阻まれる。

その間に“人形”は心臓の下に辿り着いてしまった。

「フォトンニードル！」

<Fire>

俺はフォトンニードルを放つ。

だが、純粋な魔力で構成されたフォトンニードルは先ほどよりも簡単に、心臓が放つ魔力の波動に防がれた。

——“人形”が心臓を掴み取る。

そして“人形”はその心臓をそのまま——

——丸呑みにした。

魔力の波動が収まった。

しかし、今度は“人形”の内部に魔力が満ち溢れていくのを感じる。

——これは……面倒なことになりそうだな……………。

俺は生気を感じさせ始めた“人形”を見ながらそう思った。

Fate／destiny 1-5：“心臓”（後書き）

真打、マリアンヌ登場。

ネグアリフさんは最初の大ききのせいで“種”と思っていましたが、あれはマリアンヌさんの心臓です。

ていうか、戦闘描写って難しい！

自分の技量じゃ、ちゃんとした描写なんて出来そうに無いです。

今回、ネグアリフさんはあっさりやられた感が否めませんが、それは最初の不意打ちが原因と言うことで。

PV…37000、ユニーク…7200突破。皆さん読んでくださり、本当にありがとうございます。

次回、理不尽人形マリアンヌが大暴れ。

……正直、書きながら勝てるのか不安になってきた。

Fate／destiny 1－6：マリアンヌ（前書き）

この辺から作者の妄想、およびご都合主義、原作設定との矛盾、その他諸々が酷くなっています。

おそらく加速度的に酷くなっていくでしょう。

原作が好きな皆様は撤退することをお勧めします。

……………戦闘描写難しい。

Fate／destiny 1－6：マリアンヌ

――“人形”が動き出す。

――いや、もはや“人形”とは呼べないかもしれない。

――満ち溢れる生気は、彼女を“人形”と呼ぶには多すぎた。

俺はトリシュラを構え、相手の出方を伺う。

動き出した“人形”――マリアンヌは今のところ、“心臓”を取り込んだ以外は何のアクションも起こしていない。

だが……それが逆に不気味だ。

――どうする、さっきみたいに突っ込むか？

俺は死徒に行ったような突撃をしようかと考えた。
だが、すぐに自分の考えを否定する。

――いや、さっきの死徒みたいに何かに氣をとられているわけでもないのに、自分から突っ込むのは危険か……。

マリアンヌの顔がゆっくりとこちらを向く。
俺は身構え、すぐに行動を起こせるようにした。
こちらを向いたマリアンヌの口から言葉が発せられる。

「――敵性生物を確認。殲滅を開始します」

――瞬間。

マリアンヌの拳が至近に迫っていた。

「っ!」

マリアンヌの拳が床を砕く。

そして、俺はマリアンヌの背後に居た。

咄嗟に理解の魔眼を使って転移したのだ。

――動きが速過ぎだろ……さっきの死徒だってあそこまで早くは
なかったぞ……。

あまり距離が離れていなかったとは言え、ほとんど眼に映らなかった。
師匠たちに危険を感じた時、条件反射的に転移することを仕込ま
れてなかったら、死んでいたかもしれない。

これでは、近接戦は分が悪そうだ。

「フォトンニードル」

<Photon needle>

「ファイア！」

フォトンニードルを放つ。その数、三十七。

金色の針は一直線に、または背後や側面で鋭角的に方向転換しながら、全てがマリアンヌに殺到する。

だが――

――マリアンヌの身体から魔力が放出され、金色の針は勢いを失い消滅する。

――その全てが打ち消された。

先ほど“心臓”を攻撃した時と同様、魔力の波動によって打ち消したらしい。

“心臓”が剥き出しだった時に比べて、波動が届く範囲は小さくなっているようだが、威力は変わりないらしい。

――地下じゃ、動き辛いな……。

一旦、外に出るとするか。

「トリシュラ。最初に転移した場所の座標、保存してあるな？」

<Yes sir>

「よし、一度表へ離脱するぞ」

そう指示を出しつつ、俺はマリアンヌにバインドを仕掛ける。

こちらが一瞬で転移したことを警戒したのか、動かないでいたマリアンヌの両手両足がバインドによって拘束される。

もちろん、そう長くはもたないだろう。せいぜい、数秒が限度だ。

——だが、それで十分だ。

俺は転移魔法を使い、屋外に離脱した。

「——術式の判別に成功。使用されたのは転移魔法。転移先は……」

地下に取り残されたマリアンヌが無機質な声を発する。

その声はどこと無く、聞くものに違和感を感じさせられるものだった。

だが——何故、違和感を感じるのだろうか。

彼女は元々“人形”。無機質な声を発しても、なんら違和感を感じさせるものではないはずだ。

にも拘らず、彼女の雰囲気と声は無視しきれないギャップがあった。

——彼女に満ち溢れる生气。

禍々しさを感じさせるそれが、彼女に活発的な雰囲気を纏わせている。

その雰囲気彼女の無表情と無機質な声に違和感を感じさせていた。

——彼女はもう人間とほとんど変わりが無くなっている。

彼女は表情を一切変えず、両手を天井——地上へと向けた。

その両手に藍色の光球が発生する。

「――ブレイズキャノン」

――そして、藍色の砲撃が放たれた。

俺が屋敷の前に転移した直後だった。

――藍色の光が地面を貫き、天に向かって伸びていく。

「おいおい、マジか……」

死徒の工房であった屋敷は跡形も無く消え去っていた。
要であった工房が消失したせいか、街を覆っていた神殿も消えていく。

それを確認すると、俺は飛行魔法で屋敷から離脱しながら、師匠へと念話をした。

「――師匠、聞こえますか？」

「聞こえるわよ。どう、死徒は片付いた？」

こっちの“剥製”はさっき、そっちで魔力が高まってからどんどん倒れていったけど」

どうやら、あの“剥製”達には“心臓”に喰らわせる魂のストック、と言う役割もあったようだ。

屋敷からここに来るまで、魂を持っていかれたらしい死体がいくつかあったが、地下に流れ込んだ魔力に比べると、少し少ない気がした。

おそらく“剥製”の中の魂も持ってきていたのだろう。
態々“剥製”に加工していたのは魂を持って来やすくするためだろうか。

「いえ、死徒の方は倒せたんですが……」

「なんかあったの？」

「実は……」

——俺は飛行速度を上げつつ、現状を簡単に説明する。

「ふーん。面白そうなことになってんじゃない」

「あの……ふざけてる場合じゃありませんよ？ あれ、明らかに死徒本人より厄介です」

「——ねえ、ディステイ」

自分の感想を述べる俺に対して、師匠が返答をする。

俺はその師匠の声色に嫌な予感がした。

師匠の声色は面白いこと——すなわち、俺にとっての面倒事——を思いついた時のものだった。

「あなた、一人でソイツ始末しなさい」

「え、ちよっ、待ってください！ 援護無しですか！？」

師匠からの命令に、俺は焦った声を出してしまった。

俺一人に対処させられるのは結構あったりするのだが、今回は非常に嫌な予感がするのだ。

そうでなくとも、あれだけの魔力を持つ相手だ。

一人で闘うのは骨が折れるに違いない。

「最近、互角以上の相手とやってないでしょ。私たち除いて」

「そりゃ、そうですけど……」

確かにこの頃は師匠たち——と言っても、戦闘を修行に入れているのはほぼ師匠だけだが——互角以上の相手とは戦っていない。

先生からの依頼などで次元世界の生物を狩ったり、ロストログアを回収してきたりすることはあるが、この頃は手際が良くなってきたため、戦闘自体少ない。

「まあ、本気でまずそうなら私が何とかするから。文句言わずにやりなさい。」

それと、こっちで封時結界は展開しとくわ」

その通信と共に、師匠の後ろでカートリッジをロードする音が聞こえる。

そして、周囲から人の気配が消えた。

師匠のデバイスは封時結界——カートリッジ使用前提ではあるが——も使えるようになっていた。思いつきり暴れる時に重宝しているそう。

——さて、本当に面倒なことになったな……

正直言って、あれには本当に嫌な予感しかしないのだ。

だが、師匠の命令である。遂行しなければ、今度は師匠の一方的な指導が待っている。

「とりあえず、まずは……」

情報収集からといきますか。

俺は師匠とは別のところに通信を繋ぐ。

目の前にモニターが表示され、眠そうな顔をした姉さんが映った

「あー、こちらデイスティ。姉さん、聞こえる？」

「聞こえてるよー……」。

どうしたの……デイスティ。お土産の希望調査……？」

姉さんの口調には寝起き特有の間延びが感じられた。

最近、また使い魔を造っていたから、それが一段落して休んでいたところだったのかもしれない。

「違う違う。今、師匠との仕事の最中なんだけど……ちょっと問題が起きてさ。

それで、寝起きのところ悪いかもしれないけど、姉さんに調べてもらいたいことがあるんだ」

「ん？ 何を調べるの？」

姉さんの口調から間延びが消えた。

こういう切り替えの速さは見習いたいところだ。

「“マリアンヌ” っていうロストログアについて。何でもいいから情報が欲しい」

「了解。その代わり……」

「分かってる。土産は厳選するよ」

「それで良し！ 今調べるから、ちょっと待っててね」

———どうしようか……

ここで姉さんからの情報を待ってもいいが、そろそろマリアンヌも行動を開始しているだろう。

——監視を兼ねて、こちらでも探ってみた方がいいか……

「こっちもある程度探ってみるから、分かったら連絡を」

「……調べるって言っても、魔眼はあんまり使わないようにね」

姉さんが釘を刺してくる。

理解の魔眼を使うのには、俺に負担が掛かる。

「分かってる」

そう言って、姉さんと通信を一旦打ち切った。

そして、サーチチャーを数機、マリアンヌの方へ向かわせる。

何かしら情報が手に入るといいんだが……。

——ディスティが態勢を整えている頃。

マリアンヌもまた戦いの準備を始めていた。

「サーチチャーを配置。広域走査を開始」

屋敷があった場所に出来た大穴を抜け、地上へと飛び上がったきたマリアンヌは近くに敵影が無いことを確認するとすぐ、索敵を開始する。

マリアンヌの下から十数個のサーチャーが放たれた。

それらは様々な色の魔力光を発しながら上空へと飛んでいく。

ある程度の高度まで達すると、サーチャーは四方八方へと飛び散っていった。

彼女がサーチャーが飛び散った上空を見上げていると、空の色が変わる。

「術式の判別を開始……………解析完了、ミッドチルダ式の『封時結界』と断定」

術式を判別したマリアンヌは特に何もせず、視線を前に戻した。自分に実害が無いものと判断したようだ。

——唐突にマリアンヌが手を横へ突き出す。

「シュートバレット」

赤色の魔力弾が発射される。

魔力弾はその先の物陰に配置されていた金色のサーチャーを破壊した。

サーチャーの破壊を確認すると、マリアンヌは飛行魔法を使って空中に移動した。

「——あの距離までは知覚範囲か…………」

マリアンヌから離れた建物の中にいた俺は、サーチャーが破壊されたのを別のサーチャーから確認した。

——約五十メートルほど。

その距離からマリアンヌは、俺が奴のサーチャーに見つからないように配置したサーチャーを感知、破壊した。

つまり、奴単体の知覚範囲は奴の周囲、半径約五十メートル圏内。その内に入れば、すぐに奴に気付かれる。

「威力の弱い攻撃じゃ、あの防御を貫けないし……かと言って、砲撃なんぞしようものならすぐにこっちに気付くだろうしな……」

あれだけの感知能力を持っているんだ。

砲撃魔法を放つ際の魔力の高まりぐらいいは知覚出来るだろう。

そうなれば、誘導が利きにくい砲撃魔法を避けるぐらいいは出来るはずだ。

「バインドで拘束、その後に砲撃……ってのもありだが——如何せん、確実性にかけるしなあ……」

一撃で終わってくれればいいが、そう甘くは無いだろう。

さっきもバインドを使っているわけだし、そう何度も掛かってくれはしないはずだ。

——あんな相手を一撃で沈められる砲撃なんて俺に撃てるわけないし。

少なく見積もって、奴の魔力量はSSランクは軽くオーバーしている。もしかしたら、SSSランクもオーバーしているかも知れない。

魔力の波動による物理・魔力両面への防御が消えることは無いだろう。

その防御を抜いて、しかも相手を行動不能に陥らせるには何発もの砲撃を叩き込まなければならない。

——まあ……“アレ”を使えば何とかなるかも知れないけど。

“アレ”は本当の最終手段だ。

見ている人間がいらないとは言え、そうそう使うもんじゃない。

——それに……あの魔力光……。

奴は魔法は複数の魔力光を放っていた。

通常、魔力光は一人の魔導師につき一色。

単独で複数の魔力光を放つ魔導師、というのは知識の中に何人かいるが……最悪の可能性が当たっていると非常に拙い。

一応、“アレ”は魔術礼装ではあるが、ミッド式も使っているのだ。

もしも、その術式が奴に渡れば形勢は一気にこちらの不利になるだろう。

そのため、なおさら安易に使うことは出来ない。

俺が奴への対抗策を考えていると、トリシユラから警告が発せられる。

<Searchers are approaching>

「了解だ。設置型の迎撃魔法を展開。」

ここの座標を保存した後、転移するぞ」

サーチャーは早めに潰しておく方が賢明だろう。
ただ破壊したり、ジャミングしただけでは相手に自分の居場所を
教えているようなものだが、設置型の魔法等で行えば霍乱にもなる。
ついでにここの座標も保存しておけば、いざという時に避難でき
る。

「しかし……どうしたもんか……」

このままだと手が出せないまま、師匠のカートリッジが切れて封
時結界が解除されるだろう。

別に封時結界が無くとも闘えるし、いざとなったら俺の方で張れ
ばいいのだが……。

封時結界が無いと隠蔽が面倒になることは確実だし、あんなのを
相手にするなら少しでも負担は減らすべきだ。

よって、出来るだけ師匠のカートリッジが切れる前に決着を付け
たい。

幸い、この間補充したばかりだからすぐに切れることは無いだろ
う。

だが、制限時間があるのは確かだ。

——今思えば、俺は油断していたのだろう。

——制限時間なんかを気にしていたのだから。

——その可能性を当然、考慮に入れて良いはずだったのに。

——俺は、奴が放ったサーチャーは全て把握していると思っていたのだ。

——それ故に気付かなかった。

——相手が隠蔽性の高いサーチャーを、こちらが気付かぬように配置していたことに。

俺が転移しようと、マリアンヌから眼を離れた時だった。
突如、背後に巨大な魔力反応が現れた。

「ッ?!」

背後の輝き——藍色の魔力光を確認して、俺は横に飛び退く。
そして、先ほどまでいたところを藍色の砲撃が通り過ぎる。
さらに、後ろからまた赤色の魔力光と膨大な魔力を感じた。

——追撃!

「クッ……!」

俺は先ほどの砲撃が造った大穴から外の座標を『理解』し、転移する。

外へと脱出した俺に休む暇は与えられなかった。
次々に魔力反応が生まれ、様々な魔力光を放つ砲撃や射撃が雨霞の如く放たれる。

俺はそれらを高速飛行と転移を駆使して避け続ける。

マルチタスクを使い、放たれている魔法の共通点である黄緑色のゲート——そのゲートから魔法が発射されている——に『理解』を行う。

「ツチ……」

鈍い痛みが頭に広がる。

そのせいでいくつかの射撃魔法を避けきれず、バリアジャケットを削られる。

だが、術式について『理解』は出来た。

——転移魔法の応用で、自分の手元に展開したゲートと他の場所に展開したゲートを任意で繋げ、攻撃や転送などを行う魔法。

さっきからしている攻撃は遠隔で展開、即時接続、攻撃という手順で行っているらしい。

本来は設置型魔法のようだが……馬鹿みたいに高度な演算能力を使って遠隔での即時展開を可能にしていた。

かなり対策のしづらい魔法だ。

こちらの位置さえ分かっただけで、奴がどこに居ようと攻撃を受けるということ。

「まずは、とりあえず……この状況から、抜け出す、かな」

次々に放たれる魔法を避けながら、俺は転移魔法を使う。

座標は先ほど師匠に連絡を取った場所。

保存しておいた座標をトリシュラから引っ張り出し、転移魔法でその場から離脱した。

マリアンヌはサーチャーが破壊されるのを感知した。

今までは散発的だったサーチャーの破壊がその頻度を増していた。サーチャーが破壊される直前に送られてきた情報からしても、あの黒衣の魔導師に違いはない、とマリアンヌは判断した。

——マリアンヌの優先事項は付近の魔導師の殲滅。

今のところ、封時結界内にあの黒衣の魔導師以外の反応は確認されていない。

——彼女が封時結界を放置したのは、魔導師を発見しやすくするためである。

“木を隠すなら森の中”とはよく言ったもの。

人ごみの中に紛れられれば、魔導師の発見はし辛くなる。

別段、無くても困りはしない。

マリアンヌにとって、周囲の被害など感知することではないのだから。

だが、在ったほうが彼女の役割を迅速に終わらせることが出来る。今、他の要因——動物など——による破壊がありえない状況なのだから、必然的にサーチャーを破壊しているのは、黒衣の魔導師という結論に至る。

「当該空域にサーチャーを重点的に配置」

——今のマリアンヌは“狩人”。

——黒衣の魔導師は彼女の“獲物”。

——この街という“森”

——そして……“狩り”が始まった。

Fate／destiny 1－6：マリアンヌ（後書き）

PV50000、ユニーク100000突破！

読んでくださりありがとうございます。

しかしながら、前書きにも書いたとおり、この後から作者の妄想、およびご都合主義、原作設定との矛盾、その他諸々が加速度的に酷くなることが予想されます。

原作が好きな方々は撤退、もしくはそれを了承した上でお読みください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3281j/>

Fate/destiny

2010年10月15日21時39分発行